

保護者の乳幼児に対する身体接触に関する調査研究

鎌田 桃代

I. 問題と目的

近年オキシトシンに関する研究が行われる中で、人の側において身体的に触れ合うことが健康にとって大切であるということが科学的に証明され、身体接触が人間関係において重要な役割をもつことが指摘されるようになってきた。¹⁾ 乳児期における身体接触の重要性は、Harlow²⁾ 等によって指摘されており、広く知られたものとなっている。山口³⁾ は幼少期を対象に研究を行い、乳児期だけでなく幼少期にも保護者から十分な身体接触をうけることが、その後の人間関係や心の健康において重要であることを指摘している。このように生きていく中で身体接触は重要なものであるが、発達に合わせて必要な身体接触の量や方法、相手があると考えられる。

実際に麻生⁴⁾ は、1~2歳児の母親を対象に生後1年間の身体接触を想起してもらう調査と、生後4か月の乳児をもつ母親を対象に現在行っている身体接触についての調査を行い、母親が養育場面に応じて適切な性質の身体接触を機能的に用いていることを明らかにしている。しかし、1歳以降の子どもをもつ保護者がどのように身体接触を行っているのかということ、また子どもの年齢と共にどのような変化が見られるかということは明らかにされていない。鈴木・春木⁵⁾ は幼少期の子どもの身体接触について調査を行い、保護者からの身体接触は年齢が大きくなるにつれて減少し、思春期を境に激減することを明らかにしている。この調査は幼少期を6つの段階に分け、自身が両親と友人の4つの対象から受けた身体接触の頻度を自己評価するものであり、ほとんどの項目が段階を重ねるごとに減少することを指摘しているが、1つ目の段階が幼稚園までとされており、それ以前の時期に他者から受けた身体接触の頻度については調査されていない。そして自身が受けた身体接触を回顧し、自己評価した頻度は、思い出や周囲から聞く話などに影響されていることも考えられる。

そこで本研究では、子育て中である保護者を対象に意識調査を行い、身体接触に対する考えや身体接触の内容を明らかにすることを目的とする。

II. 意識調査の概要

1. 方法

A県内の子育て支援センター3か所を利用している保護者、及び幼稚園2園の保護者（満3歳児クラスを含む）307名（父親8名、母親299名）を対象に質問紙を用いた調査を2016年9月—11月に実施した。

配布数394、回収数307、回収率79.1%。回答者数の少ない6歳と著しい欠損値があるものを除いた288名を分析対象とした。内訳は右の通りである（表1）。

アンケートの冒頭にて研究目的に同意できる方に回答求め、回答をもって倫

表1 子どもの年齢別回答者数

年齢	人数
0歳	24
1歳	70
2歳	71
3歳	60
4歳	31
5歳	32
計 288名	

理的な同意とした。

2. 内容

調査を行った項目は以下の3つである。

- ・身体接触に対する保護者の考え方
- ・保護者の子どもに対する身体接触の実態
- ・保護者自身の幼少期における身体接触経験

Ⅲ. 調査結果・考察

1. 身体接触に対する保護者の考え方

(1) 身体接触がなぜ大切か

子どもと身体接触をとることが大切だと思うか尋ねたところ、274名(96.8%)が「とても大切である」と考えていることが明らかになった。

身体接触を大切だと思ったきっかけについて複数回答可で尋ねたところ、「自身の幼児期の経験から」143名(49.7%)、「子育て経験から」133名(46.2%)、「本などの知識から」129名(44.8%)が上位の項目であった。また、「本能的に」や「そういうもの」などの意見もみられ、無意識的に子どもとの身体接触は大切なものであると感じて行っている保護者や、「自分が欲しているから」身体接触を大切なものと考えて行っている保護者もいた。

身体接触を大切だとする理由について、「子どもの姿から」、「自身の思いから」、「自身の幼児期の経験から」の3群においてそれぞれ5,6項目を設定し、計17項目から複数回答可で回答してもらった。回答数を群ごとに合計すると、「子どもの姿から」身体接触が大切だとする回答が925件、「自身の思いから」が885件、「自身の幼児期の経験から」が561件であった。「子どもの姿から」「自身の幼児期の経験から」の2つの群は選択肢が5つであるが、「自身の思いから」の群は選択肢が6つであることを考慮すると、最も多く選択された回答群は「子どもの姿から」であり、「自身の思いから」「自身の幼児期の経験から」と続いた。「子どもの姿から」と「自身の思いから」の2群における回答数に差はみられるが大きな差ではないことから、保護者は身体接触を子どものために大切であると考えてだけでなく、子どもの育ちを支える自身にとっても大切であると考えている。このことから、身体接触は受ける側だけでなく、行う側にとっても価値あるものだといえる。

①子どもの姿から

ほとんどの保護者は、子どもが「うれしいと感じる・笑顔になる」「落ち着く・安心する」と感じることから身体接触が大切であると考えていることが明らかになった(図1)。また、子どもの年齢が大きくなるにつれて、子どもが「元気・勇気がでる」と感じることを理由に挙げる保護者の数が増加傾向にあり、保護者からの身体接触は、子どもにとって快感情を引きだすものであり、背中を押ししてくれるものであると考えられる。

②自身の思いから

自身にとって「うれしいと感じる・笑顔になる」「コミュニケーション手段になる」と感じることから子どもとの身体接触を大切だとする保護者が多くいることが明らかになった(図2)。また、身体接触が「コミュニケーション手段になる」から大切だと考えている保護者は0歳の保護者で75%、1歳で71%であるが、3歳で81%、4歳で83%と最も多くなっていることから、子どもの年齢が大きくなっても親子間のコミュニケーションの手段として身体接触が重要であると考えられる。

「子どもの姿から」と「自身の思いから」について比較してみると、「うれしいと感じる・笑顔になる」

が上位である点、「心地よいと感じる」が平均50%台である点が共通していた。共に「うれしいと感じる・笑顔になる」が上位であることから、親子の身体接触はポジティブな情動を共有し、同調することができると考えられる。子どもが「落ち着く・安心する」と感じる保護者は平均90%であり、「子どもの姿から」の群では上位の項目である。しかし、自身が「落ち着く・安心する」としている保護者は平均50%であることから、身体接触は受ける側の子どもにとって「落ち着く・安心する」ものであるといえる。

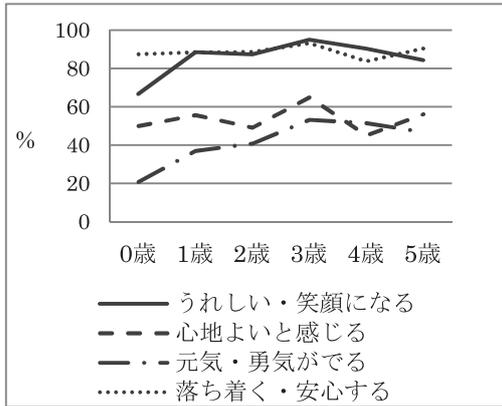


図1 子どもの姿から

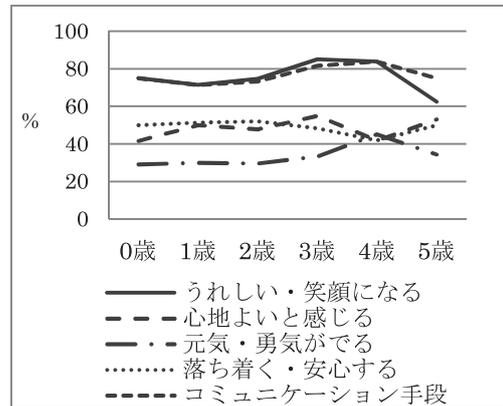


図2 自身の思いから

③自身の幼少期の経験から

自身が身体接触をうけることで「落ち着く・安心する」経験をしたことから子どもに対しても身体接触が大切であると考え保護者が最も多く、続いて「うれしい・笑顔になる」経験が多いことが明らかになった。「子どもの姿から」や「自身の思いから」と同じように「心地よい」「元気・勇気が出る」経験は他の項目より値が低かった。

保護者の記憶が現在の子育てに影響を受けている可能性も考えられるが、「子どもの姿から」と「自身の幼少期の経験から」について比較してみると二つが同じような形のグラフになったことから、子どもが保護者からの身体接触で感じるものは変わっていないと考えられる。

(2) いつまで身体接触が大切か

子どもにとって身体接触がいつまで大切だと考えているか尋ねたところ、「いつまでも大切」147名(51.9%)、「子どもが嫌がるようになるまで大切」92名(32.5%)であり、多くの保護者が身体接触を子どもとの大切な関わりの一つであると考えていることが明らかになった。一方で「小学校入学まで大切」20名(7.1%)、「4歳まで大切」6名(2.1%)であり、子どもとの身体接触を乳幼児期に限定し、大切にしている保護者が1割近くいることも明らかになった。

2. 身体接触の実態

(1) 身体接触頻度について

子どもと身体接触をとるか4件法で回答を求めたところ、「とてもよく行う」保護者が152名(53.1%)であり、「とてもよく行う」「よく行う」を合わせると266名(93.0%)の保護者が身体接触を行っていることが明らかになった。さらに回答を得点化して比較してみたところ以下の結果が得られた(表2)。

表2 年齢ごとの平均点

年齢	平均点
0歳	3.6
1歳	3.5
2歳	3.3
3歳	3.4
4歳	3.4
5歳	3.4

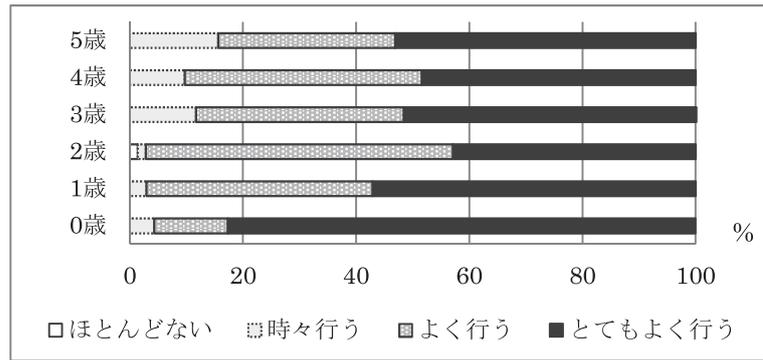


図3 各年齢の身体接触頻度

身体接触頻度について分散分析を行ったところ有意な差は認められなかった ($F(5/280) = 1.95, p > .05$)。ほとんどの年齢で保護者の半数が身体接触をとてもよく行っていることが明らかになったが、回答を詳しくみてみると身体接触を「とてもよく行う」としている保護者の数は0歳で最も多くそれ以降減少し、3,4,5歳においてはほぼ変動がない。2歳頃から「よく行う」とする保護者の数は減少し始め、「時々行う」とする保護者の数が増加する。また、3歳以降において行われる身体接触に大きな変化が見られないことから、子どもに対する身体接触は2歳頃を境に変化すると考えられる(図3)。

(2) 身体接触の方法 (複数回答)

どのような身体接触を行っているか、あてはまる項目すべてを選んでもらったところ、「抱きしめる」を行っている保護者が263名(91.3%)と最も多く、「手をつなぐ・握る」「だっこする」が252名(87.5%)、「頭をなでる」が241名(83.7%)と続いた。「抱きしめる」「だっこする」「くすぐる」の三つ方法は身体接触頻度に年齢による差がほとんど見られなかった(図4)。

男児と女児を比較したところ、わずかな差のものもあるが、15項目のうち12項目で女児より男児が保護者からうける身体接触が多かった。特に「頭をなでる」「膝に乗せる」「肩に手をのせる」において有意な差が認められた(順に $\chi^2(1) = 3.92, p < .05, \chi^2(1) = 5.90, p < .05, \chi^2(1) = 6.24, p < .05$)。

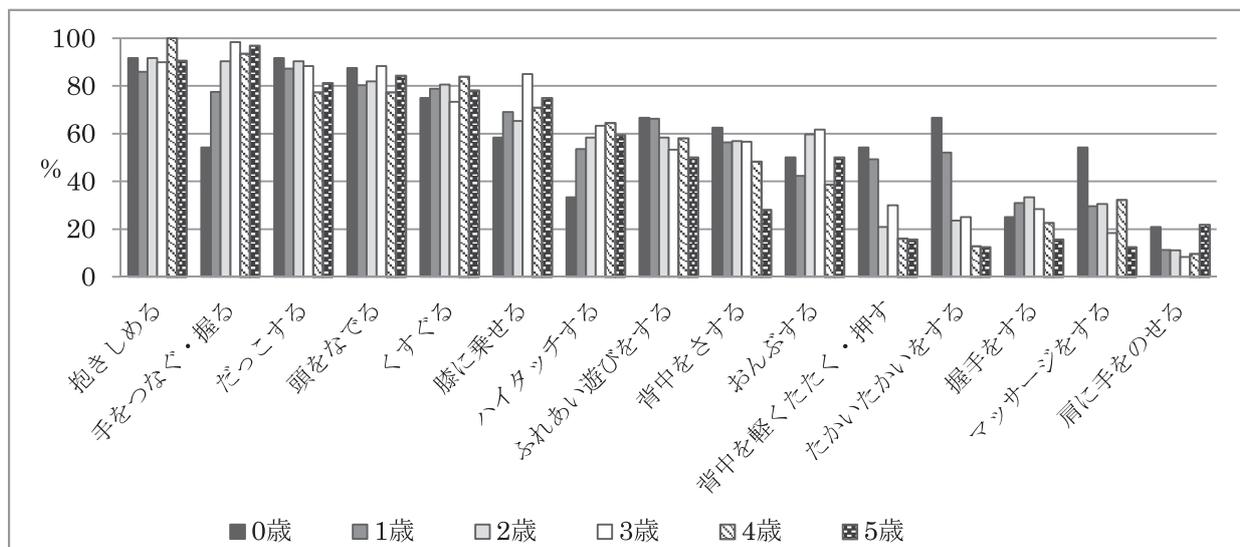


図4 身体接触の方法

(3) 身体接触の場面（複数回答）

「泣いている時」に身体接触を用いる人が248名（86.1%）と最も多く、「就寝時」が213名（74.0%）、「うれしそうな時」が248名（66.7%）、「さびしそうな時」が182名（63.2%）と続いた（図5）。

「泣いている時」の身体接触について子どもの年齢に着目して χ^2 検定を行ったところ、有意な差があると認められた（ $\chi^2(5) = 14.62, p < .05$ ）。残差分析を行ったところ、0歳において少なく、2歳において多いことが明らかになったことから、「泣いている時」の身体接触は年齢と共に増加し、2歳が最も多いといえる。「子どもと気持ちを分かち合いたい時」に身体接触をとる保護者147名のうち、子どもの年齢について χ^2 検定を行ったところ、有意な差が認められた（ $\chi^2(5) = 19.80, p < .01$ ）。残差分析を行ったところ、0歳において少ないことが明らかになったことから、「子どもと気持ちを分かち合いたい時」の身体接触は0歳で行われにくく、子どもの年齢と共に増加する傾向にあるといえる。

男児と女児を比較したところ、ほとんどがわずかな差ではあるが16場面のうち15項目で女児より男児が保護者からうける身体接触が多かった。特に「起床時」「身支度時」「泣いている時」において有意な差が認められた（順に $\chi^2(1) = 4.16, p < .05, \chi^2(1) = 6.98, p < .01, \chi^2(1) = 4.04, p < .05$ ）。

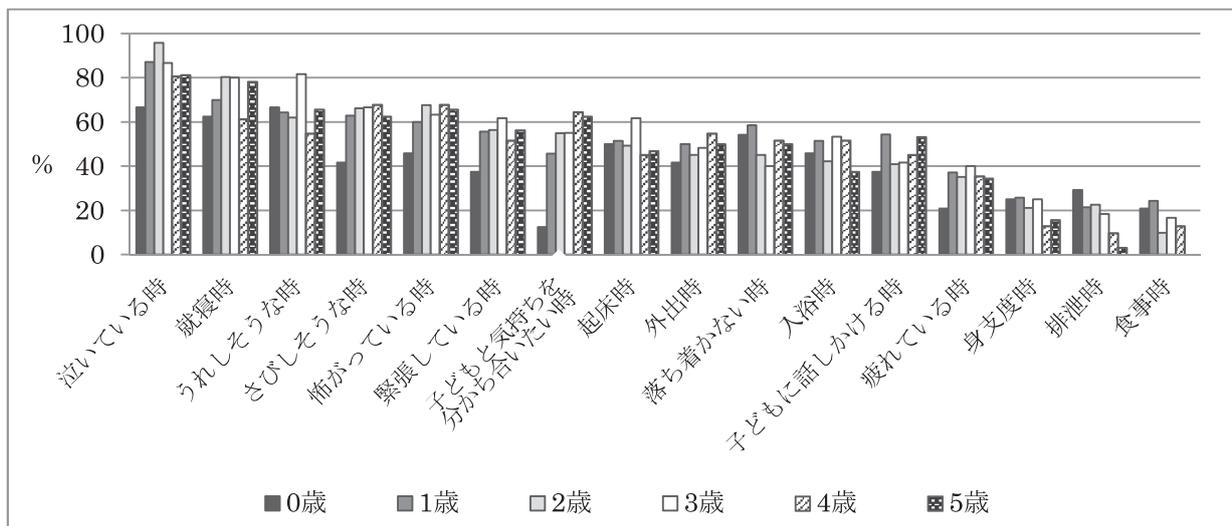


図5 身体接触の場面

身体接触の場면을「うれしそうな時」「泣いている時」のような感情場面と「起床時」「就寝時」のような生活場面の2つに分けてみると、感情場面において用いられる身体接触が生活場面に比べて多いことや、感情場面で用いられる身体接触は1歳で増加し年齢による変化がほとんどないが、生活場面の身体接触は、4歳から減少傾向にあることが明らかになった（図6）。感情場面において用いられる身体接触の割合が1歳で増加することについて、感情場面の質問項目が0歳には不適切であったことが理由として考えられる。

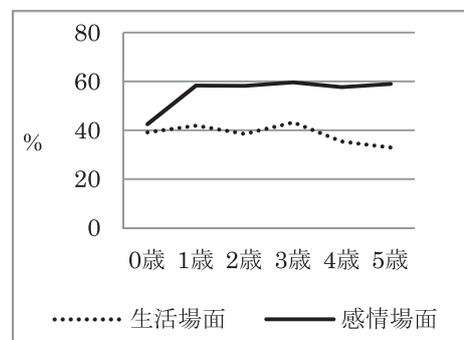


図6 身体接触の平均頻度

表3 身体接触方法・場面の上位年齢

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳
方法	背中を軽くたたく・押す ** (54.2%) たかいたかひをする** (66.7%) ふれあい遊びをする (66.7%) マッサージをする** (54.2%) 背中をさする (62.5%) だっこする (91.7%) 頭をなでる 肩に手をのせる (21.9%)	背中を軽くたたく・押す** たかいたかひをする** ふれあい遊びをする だっこする 握手する くすぐる	だっこする おんぶする 握手する (33.3%) くすぐる	だっこする おんぶする (61.7%) 膝に乗せる (85%) ハイタッチする 握手する 手をつなぐ・握る** (98.3%) 頭をなでる (88.3%)	抱きしめる (100%) ハイタッチする (64.5%) くすぐる (83.9%)	ハイタッチする 手をつなぐ・握る 頭をなでる 肩に手をのせる
場面	排泄時 (29.2%) 食事時 身支度時 落ち着かない時	食事時* (24.3%) 身支度時 (25.7%) 入浴時 落ち着かない時 (58.6%) 疲れている時 子どもに話しかける時 (54.3%)	身支度時 就寝時 (80.3%) 泣いている時* (95.8%) さびしそうな時 怖がっている時	身支度時 入浴時 (53.3%) 起床時 (61.7%) 就寝時 うれしそうな時 (81.7%) 疲れている時 (40.0%) さびしそうな時 緊張している時 (61.7%)	入浴時 外出時 (54.8%) さびしそうな時 (67.7%) 怖がっている時 (67.7%) 気持ちを分かち合いたい時 (64.5%)	外出時 怖がっている時 気持ちを分かち合いたい時 子どもに話しかける時

* ; $p < .05$, ** ; $p < .01$ 水準で有意な差が認められたもの。

身体接触の方法と場面について、各項目において最も値が大きかった年齢、加えて最も値が大きかった年齢の-5%の範囲に値があった年齢についてまとめてみると、3歳において身体接触の方法・場面共に他の年齢と比べて値の大きい項目が多くあることが明らかになった。2,3,4歳頃は「泣いている時」「さびしそうな時」などの身体接触が多いことから、好奇心と不安を抱えるこの時期に保護者との身体接触が心の支えになると考えられる。また、0歳から3歳頃にかけて「だっこする」が多く、3,4歳頃からは「抱きしめる」「頭をなでる」「ハイタッチする」が増加する傾向にあることから、保護者は、子どもの小さいうちは「だっこする」という方法に様々な思いを込めているが、子どもの成長と共に場面や伝えたい思いに応じて方法を変えているのではないかと考えられる（表3）。

(4) 子どもは身体接触をどう捉えているか

子どもが人に触れられることを喜んでるように感じるか尋ねたところ、「とてもあてはまる」209名（72.6%）であり、「少しあてはまる」を合わせると277名（97.5%）であった。保護者は、触れることで子どもが喜ぶとさらに触れようと思うため、相互作用で身体接触が多くなり、親子の親密さや安心感を深めることにつながると考えられる。

身体接触時間について子どもがどう感じているか尋ねたところ、身体接触時間が長くなると嫌がるそぶりが見られると回答した保護者が115名（39.9%）であった。年齢ごとに比較してみると、1歳において身体接触時間が長くなると嫌がるそぶりが見られる子どもの割合が最も高くなり、それ以降は減少傾向にある（図7）。1歳で嫌がるそぶりが見られる子どもの割合が最も高くなる理由として、1歳頃から子どもは歩行できるようになり、自分の興味や好奇心から周囲の世界に関わろうとする姿が多く見られるようになることが考えられる。身体接触頻度は、子どもの年齢と共に少しずつ減少傾向にあるが、身体接触を嫌がる子どもの割合が増加しているわけではないことから、子どもは年齢が大きくなっても保護者からの身体接触を喜んでいて、一つ一つの身体接触を心の支えとして大切にしていると考えられる。

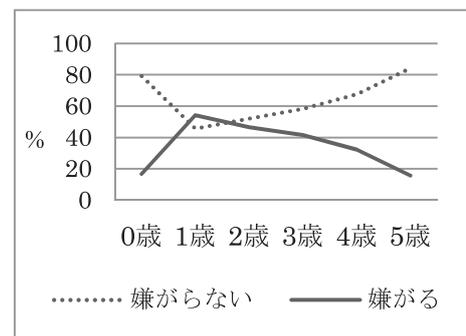


図7 身体接触時間と心情関係

3. 保護者自身の幼少期における身体接触経験

(1) 身体接触に対する思い

保護者自身が幼少期、身体接触に対してどのような思いを抱いていたか尋ねたところ、「好きだった」125名（43.4%）と最も多く、続いて「とても好きだった」106名（36.8%）であった。幼少期、保護者からどのくらい身体接触を受けたか尋ねたところ、「多かった」106名（36.8%）、続いて「とても多かった」82名（28.5%）、「少なかった」79名（27.4%）であった。

幼少期に身体接触に対して抱いていた思いと保護者から受けた身体接触の頻度の関係性を検証するために相関分析を行った結果、中程度の正の相関が認められた（ $r = .62$, $p < .01$ ）。子どもの頃に保護者から受ける身体接触頻度が高い人ほど身体接触が好きになる可能性があるということが出来る。

(2) 身体接触の方法（複数回答）

保護者自身が幼少期に受けた身体接触と、現在子どもに対して行う身体接触の関係性をみるために、幼少期に保護者から受けた身体接触で現在子どもに対して行っている方法の割合を調べた。再現率が

90% 超えていたものは「頭をなでる」「手をつなぐ・握る」「膝に乗せる」「だっこする」「抱きしめる」「くすぐる」の6つであった。「頭をなでる」「手をつなぐ・握る」「だっこする」「抱きしめる」「くすぐる」の5つは、幼少期に受けていない人も現在行っている人が70%を超えていることから、これら5つの方法は親子の身体接触として行いやすく、親子の関係を築き深めていく上で適当な身体接触であると考えられる。また、幼少期に保護者からうけた身体接触の中でも特に「手をつなぐ・握る」「抱きしめる」は97%以上の方が子どもに対して行っていることが明らかになった。幼少期に保護者からうけた身体接触の再現率はすべてのものにおいて5割を超えているのに対し、幼少期に保護者からうけていない身体接触で現在行われているもので、5割を超えるものは半数であったことから、幼少期にさまざまな身体接触をうけている人の方が子育てにおいて多くの身体接触の方法を用いる傾向にあると考えられる。

IV. まとめ

調査結果から、多くの保護者が子どもとの身体接触をととても大切であると考えており、いつまでも身体接触を大切にしたいと考えていることが明らかになった。いつまでも身体接触を大切にしたい理由として、子どもは保護者から身体接触をうけることで、励まされる、安心感を得る、心地よいなどのことが考えられるが、保護者も子どもに対して身体接触を行うことで笑顔になる、心地よいことから、身体接触を通して両者がポジティブな情動を共有し、同調できることが考えられる。また、いつまでも保護者にとって身体接触は言葉にできない気持ちを伝えるコミュニケーション手段であること、言葉を伝えやすくするためのコミュニケーション手段であることも理由であると考えられる。

具体的に身体接触の方法についてみると、「抱きしめる」「頭をなでる」「くすぐる」などの方法は子どもの年齢による差が小さく、保護者の幼少期にうけた経験有無に関わらず現在よく行われている。このことから、これらの方法は子どもが他者に受け止めてもらえたと感じる事ができる身体接触であり、他者に対して親しみを感じるきっかけになる身体接触ではないかと考えられる。山口⁶⁾の研究で、幼少期における母親からの身体接触頻度が高い人は大学生になってからも他者からの接触に対して親しみや励ましの感じを受けることが明らかにされている。従って「抱きしめる」「頭をなでる」「くすぐる」などの方法が親子の関係を築き深めていく適当な身体接触であるだけでなく、子どもの成長や情緒の安定を促し、社会で他者と関わっていく支えになると考えられる。次に身体接触の場面についてみると、「泣いている時」に身体接触が行う人が最も多い。山口⁷⁾が不安やストレスは触れることで癒すことができるとしていることから、保護者との身体接触が子どもの心の支えになっていることや、気持ちの切り替えを促す働きをしていると考えられる。

身体接触頻度は子どもの年齢と共に減少するとされているが、今回の調査では1歳で保護者からの身体接触時間が長くなると嫌がる子が1番多くそれ以降は減少し、5歳において身体接触時間が長くなると嫌がる子は20%を下回った。年齢と共に身体接触を嫌がる子が減少していることから、身体接触頻度は年齢と共に減少するが、子どもは保護者との適度な身体接触を求めており、心の拠りどころにしていると考えられる。

山口・山本・春木⁸⁾は大学生を対象に行った調査から、両親から受けた身体接触量は男性より女性の方が多いことを明らかにし、山口⁹⁾は小学5年生の子どもをもつ母親を対象に行った調査から乳児期における身体接触について性差がないことを明らかにしている。本研究は現在子育てをしている保護者と対象とし、尋ねる身体接触の方法や場面を限定したものであったが、女兒より男児が身体

接触を多く受ける方法や場面もあることが明らかになった。

今回の調査は4,5,6歳の人数が少なかったため、今後は調査対象を拡充して研究していきたい。

引用文献

- (1) シヤスティン・ウヴネース・モベリ (訳) 瀬尾智子・谷垣暁美 (2014) オキシトシン普及版 私たちのからだがつくる安らぎの物質. 晶文社
- (2) H.F ハーロウ (訳) 浜田寿美男 (1978) 愛のなりたち. ミネルヴァ書房
- (3) 山口創 (2004) 子供の「脳」は肌にある. 光文社
- (4) 麻生典子 (2016) 乳幼児に対する母親のタッチに関する研究. 風間書房
- (5) 春木豊 (2011) 動きが心をつくる 身体心理学への招待. 講談社
- (6) 山口創 (2007-08) 身体接触が気分にあぼす影響 - 幼少期の身体接触との関連. 家族問題相談研究 (5). 聖徳大学家族問題相談センター
- (7) 山口創 (2004) 子供の「脳」は肌にある. 光文社
- (8) 山口創・山本春義・春木豊 (2000) 両親から受けた身体接触と心理的不適応との関連. 健康心理学研究. Vol.13.No.2
- (9) 山口創 (2003) 乳児期における母子の身体接触が将来の攻撃性に及ぼす影響. 健康心理学研究. Vol.16.No.2